

【奈良・平安時代】

710～1191

『続日本紀』によれば、奈良時代の後半である天平宝字2年（758年）に新羅郡と呼ばれる郡が設置されました。その範囲は現在の和光市・朝霞市・志木市・新座市・練馬区の一部あたりであったといわれています。当初「新羅郡（しらぎぐん）」とされた郡名は、時代が下ると「新座郡（にいくらぐん）」と呼ばれるようになりました。いつ頃から名称が変わったかは明らかではありませんが、延長5年（927年）に完成した『延喜式』には郡名は「新座」と書かれており、その後承平年間（931～938年）に成立した『和名類聚抄』には新座と書いて爾比久良（にひくら）と読み仮名がふられていることが分かっています。

奈良・平安時代の遺跡としては花ノ木遺跡、峯前遺跡、漆台遺跡、仏ノ木遺跡、吹上遺跡、榎堂遺跡が確認されています。

花ノ木遺跡からは火熨斗が出土しました。火熨斗は今で言うアイロンです。古代の役人が衣服に使用したものと考えられます。同様に漆台遺跡から出土した円面硯（墨をするための硯）は古代の役人が文字を書くために使用したものと思われ、これらは古代の役人が住んでいた証拠とることができます。しかし、発掘調査では新羅郡の郡衙と呼ばれるような施設はまだ見つかっていません。

また、この時代には新羅郡に沙良真熊（さらのまくま）という琴の名手がいたことが『日本文徳天皇実録』によってわかっています。



漆台遺跡から出土した円面硯



円面硯の使い方



花ノ木遺跡から出土した火熨斗